

東海の古代

第270号 2023年2月

会長 : 畑田寿一
編集 : 石田泉城 投稿先アドレス : toukaikodai@yahoo.co.jp
HP : <http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm>

日本の漆文化

名古屋市 石田 泉城

1 はじめに

漆うるしの木（以下、漆の木は漆樹と記す）は、日本をはじめ、インド、中国大陸、朝鮮半島など東アジアで古くから栽培されている落葉樹です。日本の植物分類学においては、漆樹は日本自生の植物ではなく、中国大陸から日本列島に渡来したとされます。

牧野富太郎著の『牧野日本植物図鑑』（1961年）に「**支那原産にして諸処に栽植せらるる落葉高木**」と記述されており、その後の植物学者も漆樹は日本自生ではないとされます。『牧野日本植物図鑑』は、私も学生時代に重宝した植物の分類の基本となる立派な図鑑ですが、これに対して、近年、漆樹は、支那原産ではなく日本原産とあらためるような、縄文時代草創期における漆樹の枝や、縄文前期における漆製品が日本列島で新たに発見されています。

2 漆文化を外国伝来とする考古学者

考古学者の小林行雄は、「**弥生時代の漆文化は中国の秦漢文化から伝来したもの**」（1947年）とされ、同じく考古学者の江坂輝弥は、「**漆の技術が漢代文化の影響を受けた楽浪方面より我国に伝来されたもの**」（1952年）とするなど、近代の考古学者の主たる考えは、漆文化が外国由来によるというものでした。

3 考古学による漆の新たな知見

中国大陸の最古の漆製品は、2021年に浙江省井頭山遺跡で発掘された漆塗りの木器2点で、放射性炭素年代測定で約8200年前とされ、また浙江省跨湖橋遺跡で発掘された漆塗りの木弓や、同省の河姆渡遺跡で発掘された漆椀は、ともに約7400～7500年前とされます。

ところが、2011年に東北大学が福井県鳥浜貝塚から出土した木片を放射性炭素年代測定により行ったところ、約12600年前の漆の枝であることが判明し、また、北海道垣ノ島B遺跡から出土した漆塗りの肩当てや腕輪などの服飾品は、やはり放射性炭素年代測定の結果、約9000年前であり、漆樹も漆製品もともに日本列島が最古と判明しています。

なお、2011年時点で日本の縄文時代前期だけでも、漆の材が29点発掘されています。

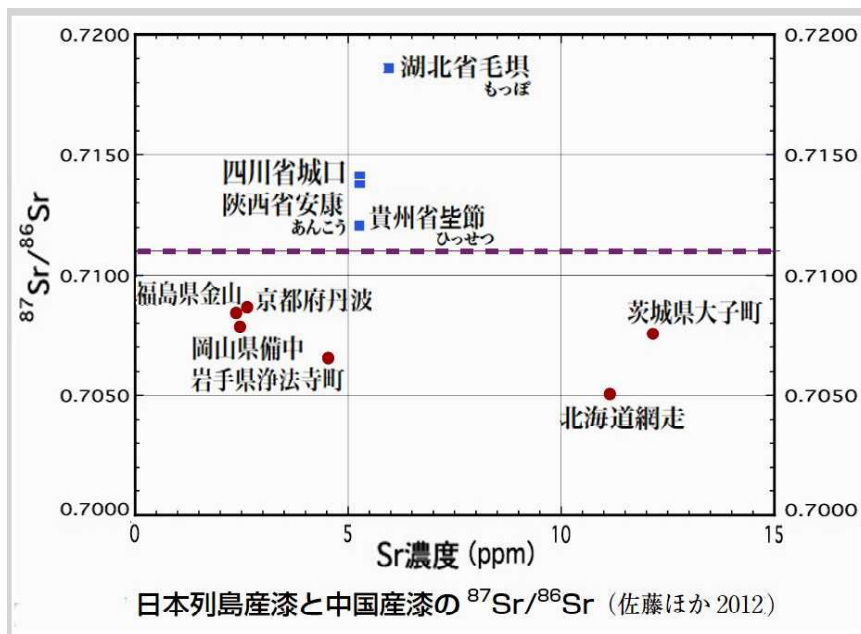
4 Sr同位対比による識別

日本列島産と中国大陸産の漆樹は、同じハプロタイプであり、遺伝子や主成分の分析では識別できませんが、生育土壌から吸収され植物組織に運ばれたSr（ストロンチウム）同位体比により両者が識別できます。

天然に存在するストロンチウムには、 ^{86}Sr と ^{87}Sr があり、 ^{86}Sr は元素合成時に作られるだけですが、 ^{87}Sr は ^{87}Rb (ルビジウム87)の崩壊によって作られ年々増加します。ですから $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ の原子数の比の値は、その地層の年代が新しいほど小さく、古いほど大きいということになります。 Sr 同位対比が0.711を境にして、中国大陸産のほうが大きいので地層は古いといえますが、重視すべきは地層の古さではなく、植物に取り込まれた Sr 同位対比を調べることで成育している場所の違いがわかる点にあります。

Sr 同位体比の分析により、漆製品は、漆樹が生育した場所の土壌の性格を反映します。

「ストロンチウム同位体分析による漆の産地同定」(吉田邦夫・佐藤正教・中井俊一、国立歴史民俗博物館研究報告225巻、2021年)によれば、遺跡ごとに Sr 同位対比がまとまった値を示し、その遺跡で得られた漆原料によって漆製品が製造されたことが実証されています。つまり、漆は「**地産地消**」されており、日本の漆製品は、外国材料ではなく日本の漆樹から採取されたものと考えられます。



5 まとめ

日本で漆器産業が盛んになったのは、近世になって各藩が経済振興のために積極策をとったからであって、それで全国で漆樹の植栽が広まり各地に漆器産地が形成されました。したがって、現在日本で見られる漆樹は近世のものがほとんどと思います。植物学者が日本の漆樹は、自然の生息ではないとされるのはこうした歴史経緯からして当然のことです。しかしながら、これを持って日本の漆樹が中国大陸由来とするのは間違いでしょう。

漆樹の枝・漆製品の発見やストロンチウム同位体の科学的見地から、漆樹は、元々日本列島に自生し、漆の生産や漆製品の製造も日本列島の縄文人によるものが最初であったと考えられます。縄文時代には漆塗りの木器や服飾品など漆製品が350点出土しています。

石器の接着、矢と鏃の接着、また、割れた土器や欠けの修復にも漆が使われており、現代の金継ぎに繋がる技法が、既に縄文時代にあったということは驚くべき事です。

漆は、縄文人にとって身近な存在であり、その利用技術は縄文社会に広く普及していたと考えられ、漆文化は、まさに縄文時代から繋がる日本の文化と言えましょう。

脱活乾漆像と塑像の考察から見た東アジア II

刈谷市 酒井 誠

はじめに

「東海の古代269号」では、奈良県の當麻寺、興福寺、東大寺にある塑像と脱活乾漆像だっかつかんしつぞうを中心に歴史をたどった。今までは私にとって塑像等にはそれほどの関心も沸くことなく眺めてきたのであるが、今回は多くのことが見えてきた。塑像は日本での製作期間が短く、作品数も少ない。塑像の作成時期にやや遅れて乾漆像が造られるようになる。

まず、塑像のアジアでの広がりを見てゆくと、西から新疆ウイグル自治区の楼蘭遺跡、甘肅省敦煌市の莫高窟遺跡、陝西省西安市の秦の始皇帝陵の兵馬俑、山西省大同市の雲崗石窟（北魏様式）などがあり、その後には朝鮮半島、楽浪郡の地域を經由して日本列島に入ってきた文化だ。莫高窟には492もの仏像があり、4世紀から約千年の間、元の時代まで彩色塑像や壁画が彫り続けられた。



楼蘭遺跡・～BC 2世紀新疆ウイグル



莫高窟・塑像 五胡十六国時代



兵馬俑（始皇帝の陪葬塚・陶器）



雲崗石仏（460～480年最盛期）

一方の乾漆像は、中国では夾紵きょうちよや壘そくと呼ばれ、山西省から江蘇省の南京あたりで仏像が造られたようであるが、記録として残っていても実物は存在しない。唐の18代皇帝、武宗が行った廃仏政策は、規模が大きく乾漆像は残らなかった。乾漆像も朝鮮半島経由と直接中国から日本に入ったルートがありそうである。注目するのは、中国の北部地方には塑像や石仏像が多く、南部の揚子江近辺では乾漆像が造られたことである。

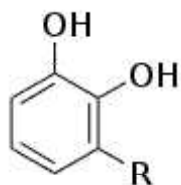
1 東アジアの漆文化

ここで少し寄り道をして「東アジアの漆文化」を概観してみる。中国浙江省杭州特別市の「良渚遺跡りやうしよ」（紀元前3500～2200年ころ）では、玉製の璧や漆文化が見られる。長江上流のチベットにおいては、現在でも食器を持ち歩く習慣があつて漆が使われている。ただし、チベットは標高が高くて、漆の木の栽培ができずに、近隣の標高の低い雲南省、四川省の地域より漆を買い入れて、漆製品を作っている。漆と言っても世界には860種もあつて、それぞれ地域によって漆の性質が異なる。そのほか、タイ、ミャンマー、カンボジア、ベトナム、ラオスなどが漆の文化圏に入る。

日本で採れる漆と比較すると、これら諸外国のものは、漆の主成分であるウルシオールウルシオールの成分比が少なくゴムの成分が多いようである。このウルシオールの成分が少ないと、乾きも遅く、美しく塗れないため蒔絵などは作れない。

ウルシ科のハゼノキからは漆が採れ、これが皮膚につくとかぶれるが、バラ科の白膠木ぬるで

はかぶれないようだ。白膠木は、枝に羽がついており、これで判別できる。トウダイグサ科のナンキンハゼもかぶれない。漆ではなくロウが取れる。



ウルシオール



漆の木



ヌルデ（白膠木）バラ科

2 漆文化圏

漆を家具に塗って使用している地域にはそれなりの訳がある。装飾的な要素もあるが、やはり衛生面での働きを重要視している。長江以南やインドシナ半島は、雑菌が増えやすい高温多湿の環境であり、人間が触れる生活用品に漆塗りをして、人体に有害な菌が繁殖しないように気をつけていると思われる。

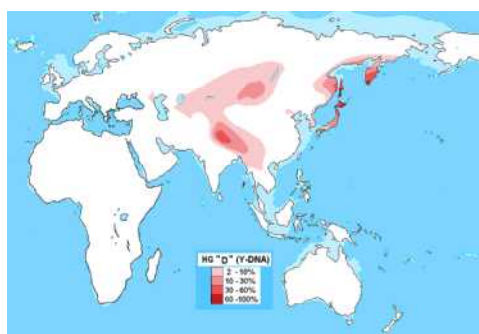
その長江に沿った地域は、有史以前に出アフリカした人類の中でY染色体ハプロタイプDを持った人類の移動と重なる地域で、インドシナ半島方面は、D遺伝子を持った人々が枝分かれした地域に当たる。移動ルートをとどったところに漆文化の栄えた地域がある。その移動した時期は、今から2万年ないし3万年以前のことと考えている。インドシナ半島に伸びている漆の文化は、D遺伝子を持った人の移動の痕跡だろう。もう一つ重なる文化は稲作文化である。

そして、その終着点に日本列島があるのではないかと考えるのである。

漆器のことを英語で「ジャパン」とも呼ぶ。下の図にあるように、チベットから日本の間の中国大陸に漆器の文化が少ししか残っていないのは、北方から来た今の漢族が文化を破壊したためと考えている。



チベットの漆器（衛生面・熱さ）



ハプロタイプDの現在の分布図

3 塑像文化圏

塑像は粘土を中心にして作った像である。可塑性のある軟材を用いて成型するために崩れやすく傷みやすい。そのために粘土に藁や紙を刻んでまぜ、雲母を貼って補強する。飛鳥の岡寺では、本尊は塑像であるが、頭部以外はほとんどが修復されている。その上に彩色を施すが、高温多湿地方ではカビが繁殖して亀裂が入りやすい。塑像は、黄河以北で盛んに作られ朝鮮半島を經由して日本に入ったと考える。

4 塑像製作から乾漆像への移行

日本では、はじめ塑像の仏像が造られたが環境条件に合わないため、やがて乾漆の仏像に移行した。高温多湿の温帯モンスーン地方では、上記のように表面が傷みやすいために、漆が利用され、さらに内部の粘土も抜き取られる「脱活乾漆像」が造られた。しかし、こ

の技法は多くの労力と大量の漆を必要とした。そのために出雲や遠江の朝廷の直轄地には、漆の木々が植樹されて税の形で上納された。平安時代中期には、乾漆像は姿を消し、木造仏像が中心に作られるようになる。

5 日本独自の漆文化の発展

奈良時代以降、日本独特の漆文化が育ち、箸、茶碗、筆筒、重箱、おぼん、襖の縁、床の間の縁、蒔絵、仏壇、額縁、堆朱などの多くの日常品に漆が利用されるようになる。特に、漆文化の集大成は、味噌汁用のお椀である。世界で唯一日本において、お椀に口をつけて飲む文化が芽生えた。茶道具などでは、塗師という言葉があるように、漆を塗った茶入れ、棗、扇子、茶杓、金継ぎ、多くの漆製品が編み出された。



茶杓



棗・蒔絵



お盆・漆塗り



堆朱・香合



箸・輪島塗



蓋つきお椀・輪島塗

6 日本語と韓国語の共通語

日本語と韓国語の間には、漆製品や衛生面での語彙に共通の言葉が見られる。

漆(うるし、ulsi、우루시)、阿修羅(あしゅら、asyula、아슈라)、筆筒(たんす、danseu、단스)などで、近年、FOXP2遺伝子がヒトの言語機能に関連する可能性が示唆されている。

7 静岡の漆生産

地球の温暖化対策、温室ガスの抑制が叫ばれる中、太陽光発電は進んでいるようであるが、そのために森の木々が伐採され緑が減少し、かつて漆の生産日本一の時期があった静岡県は、岩手県にとってかわられ現在は岩手県が一番である。元々静岡県は、9世紀初めの律令制度における「漆部司」の下で漆栽培が盛んであった土地柄で、苗字として「漆畑」「漆原」を持った人もいて、地名としても「漆山」なるところもあるようである。現在日本の漆の国内需要に対して、国内生産量はわずか3%であり、残りはほとんどが中国からの輸入に頼っている。しかし、品質が劣り、ゴム質が多く、古代の仏像や建築物の修復には、問題点が多い。そこで静岡市内の北部地区では、「オグシズ(奥静)の漆の里協議会」

を2019年に旗揚げし、町おこしの一環として、漆の木の植樹を進めている。

人口減少や山間部の過疎化のため放棄地も増え、外国資本によって買い漁られている状況のなかで、私は、花や野菜、キノコ栽培、淡水魚の養殖、果樹の販売などの事業計画に「漆の栽培」も加えようと思っている。

8 まとめ

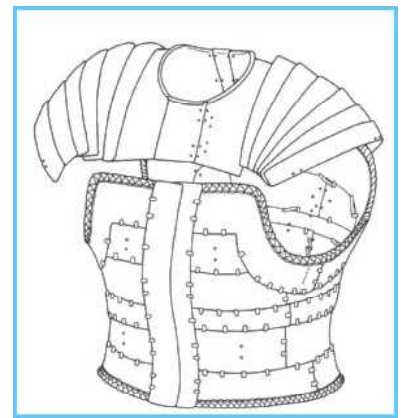
塑像、脱活乾漆像を研究する中で、漆の文化が今から2万年以上前にアジア大陸を横断して日本までやってきたのではないかと気付かされた。そして終着点である日本列島で漆文化は花開いた。高温多湿の日本では、脱活乾漆像の表面が傷みやすいために漆が利用され、また良質の漆が採れたことから日本独特の漆文化が育ったと考える。

短甲からみる倭の五王の時代の軍事力

一宮市 畑田 寿一

5世紀から6世紀にかけて日本各地や朝鮮半島南部から甲冑の一種である短甲が大量に発掘される。従来の通説ではヤマト王朝からの下賜品であり、地方の豪族とヤマト王朝との関係を示す物と考えられてきたが、豪族独自の軍事力を示すもので国造軍と呼ぶべき勢力であったとする考え方が台頭してきた。

軍事力には実行部隊以外に武器や馬の生産、外交交渉を行う能力が必要であり、今回は国内でのそれ等の能力の動向も併せて5世紀以降の国内の情勢を眺めてみたい。



(短甲：兵庫県立考古博物館)

1 5, 6世紀の朝鮮半島の倭製甲冑

高句麗の台頭により、朝鮮半島の緊張がたかまる中、朝鮮半島南部からは60領近くの帶式甲冑が出土している。この製造元には諸説あるが、倭の影響を受けていることと、交流品や戦利品でないことは大体意見が一致している。

韓国での説として朝鮮半島にやって来た倭人が死亡し、異国の地に埋められたとする説が有力であるが、新羅の占領地にも見られることから説明が難しい。やはり、昔から伽耶に住んでいた倭人が、日本列島の文化を吸収して倭製甲冑を着用して戦闘に臨んだと考えるべきであろう。

2 百舌鳥・古市古墳群の概況

古墳群	短甲の種類	出土古墳	時期
百舌鳥	三角板革綴短甲	大塚山古墳	5世紀前葉
	三角板革綴襟付短甲	大塚山古墳	
	横矧板鋌留短甲(12)	黒姫山古墳	5世紀中葉
	三角板鋌留短甲(4)	黒姫山古墳	
古市	襟付三角板革綴短甲(3)	野中古墳	5世紀後半

大阪府の堺市、羽曳野市、藤井寺市に広がる百舌鳥・古市古墳群は4世紀後半から5世紀に構築された古墳群で、広域の豪族による連合政権の伸展を示すものとして令和元年に世界遺産として登録された。登録された古墳は49基に及び、仁徳天皇陵古墳(525m)を始め、100mを超える古墳は19基を数える。消滅したものを加えると恐らく200基以上が築

造されたと考えられる。

古墳群からは甲冑を含む大量の武器が埋葬されており、通説では倭の五王の時代の倭国の朝鮮半島への出撃基地であったと考えられている。地方にも甲冑を出土する箇所が多くあるが、これらはヤマト王権主導の許、連携して出陣した証しとされている。しかし、この前提は本当に正しいのであろうか。

3 武器の変遷

(1) 甲冑の変遷

4 世紀後葉	5 世紀前葉	5 世紀後葉	6 世紀
板革綴短甲	三角板革綴短甲	三角板鋳留短甲	挂甲（けいこう）
		横矧板鋳留短甲	

最初は鉄板を紐で綴っていたが、鋳留め技術が確立し、更に小さい札状の鉄板を紐で結びつける構造に変化していった。

(2) 出土する地域の変遷

時 代	種 類	地 域
5 世紀前葉	革綴短甲	畿内、福岡東部、静岡、滋賀
5 世紀中葉	鋳留短甲	畿内、長野、宮崎、福岡全体、千葉、群馬

上記の表を眺めると、最初は畿内と九州北東部が中心であった。その後、東国、九州南部に広がって行ったことが分かる。

4 各地の甲冑の出土状況

国内各地の甲冑出土のうち特徴のある場所は、次のとおりである。

(1) 沖ノ島祭祀遺跡（福岡県）

沖ノ島の出土品は、鏡や金銅製品に注目が集り、武器については従来取り上げることが少なかった。岩上祭祀時代後半（5世紀）の7号遺跡からは新羅系の装身具や馬具が出土する。また、本土側の宗像氏の本貫地からはヤマトと同時期の短甲が出土する。

(2) 西都原古墳群（宮崎県）

西都原古墳群は九州最大の古墳群で300基以上を数える。

5世紀前半に男狭穂塚古墳（176m）や女狭穂塚古墳（176m）が造られた。しかし、その後大規模な古墳は造られず、勢力中心は大隅半島の横瀬古墳（134m）に移った。横瀬古墳は盗掘にあったためか金属類は何も残っていないが、西都原古墳群からは短甲や鉄製の武器が出土している。

(3) 船来山古墳群（岐阜県）

船来山古墳群は揖斐川の支流の糸貫川沿いに位置して、3世紀後半から7世紀まで栄えた。この地からは4世紀後半の板革綴短甲が出土している。産業としては船大工の存在が知られ、下流の荒尾南遺跡からは大型船を描いた土器が発掘されていることから外洋を巡る航海術を持っていた可能性が高い。馬具も出土し、乗馬に拠る変形した人骨も発掘されている。ただし、朝鮮半島との交易を示すものとしてはトンボ玉程度しか無いことから、防具は海賊対策であったと思われる。

(4) 飯田古墳群（長野県）

天竜川沿いに30基近くの古墳が点在して、馬や馬具とともに甲冑が出土する。この地は5世紀頃から日本有数の馬の生産地であった。馬と甲冑との関係は諸説あるが、恐らく馬の扱いに慣れた者として戦場に赴き、軍事氏族の一角を成していたと考えられる。飯田市教育委員会の春日宇光氏は5世紀前半には古墳の構築は低調であり、中頃になるとカマド

の登場とともに、馬の埋葬が盛んになることから、渡来系の氏族の流入が想定されている。

(5) 金井遺跡群 (群馬県)

遺跡群の1つの金井東裏遺跡から榛名山の噴火に巻き込まれた甲を付けた古墳人が発掘されている。時代は5世紀後半で被害者は短甲の次の時代の挂甲を着ており、矛と矢の束を持っていた。時代は少し下がるが、綿貫観音山古墳からは挂甲2領と大量の武具が発掘されている。この古墳の出土品は異国情緒に満ちており、軍事氏族の様相を呈している。

5 軍事氏族の存在

通説では「大阪の難波を中心とした勢力があり、この勢力を中核にして全国の軍事力を持つ豪族が朝鮮半島に出兵した。その威力は広開土王碑に記されているように高句麗と一戦を交える程の力があつた。」とされている。

また、短甲の型紙を研究していた榎原考古学研究所は、東西の短甲が同じ型紙からできていることから短甲はヤマトで造られ全国に配布されたとしている。

しかし、短甲も全て同じでなく、朝鮮半島での戦いも迷走を極めており、中央からの指示によるものとは考え難い。更に『日本書紀』に拠ると、突如として無名の豪族が数万の兵を率いて登場するが、活躍は継続しない。

結局、軍事力を持った氏族が存在し、これらが、任那、九州、ヤマトなどの要請に応えるとともに、利権を見出すと独自の軍事行動を行ったと考えざるを得ないのでは無いか。短甲の豪華さをヤマト王権での地位の高さには結びつけられない。

6 まとめ

短甲は、4世紀末から5世紀前半に瀬戸内海の西と東の端に登場する。この現象の意味するところは、我々が伝説と考えている仲哀・神功・応神天皇の動きであろう。伝説の一部は史実であり、朝鮮半島での動きに対応していた。

任那日本府は実在した。しかし、『日本書紀』が述べるようなヤマトの出先機関ではなく、昔からこの地に定着している倭人の朝鮮半島での拠点であった。倭人の集落は新羅の占領地にもあり、『日本書紀』が記す度重なる新羅侵攻は倭人救済の意味合いが強い。

5世紀後半に入ると軍事氏族は日本列島全土に広まった。鉄の普及により武器の殺傷能力が高まり、甲冑なしでは戦えなくなったと考えられる。大将だけが甲冑を身に付けていたのではなく、軍隊の半数以上が身に付けていた。関係する渡来人は百済・加羅系の人物が多いが、東国の綿貫観音山古墳のようにユダヤ系を連想させる氏族も現れる。各種の出身地の職業軍人組織が登場して、朝鮮半島の利権確保に活躍したと考えられる。倭の五王の論議は以上の背景を眺めながら行う必要があり、遠く離れた南宋の冊封は実質的な効果は皆無に近いが、朝鮮半島の争闘には必要であった。

前回の例会の話題

- ・三角縁神獣鏡の時代 名古屋市 石田泉城
- ・脱活乾漆像と塑像の考察から見た東アジア I
刈谷市 酒井 誠
- ・法隆寺釈迦三尊像光背銘の不思議
東海市 大島秀雄
- ・鉄仏と東海地方の鋳物師
一宮市 畑田寿一
- ・『隋書』倭国伝のタリシホコ (1)
瀬戸市 林 研心
- ・大行天皇・高市皇子説 豊山町 磯田和則

例会の予定

■ 例会の予定

- 1 日時 **2月18日(土) 13時半～**
- 2 場所 名古屋市市政資料館

■ 来月以降の例会

全て土曜日 3/18、4/15、5/20、6/17、7/15

会員の投稿について

■ 会報誌への投稿 (編集担当: 石田)

toukaikodai@yahoo.co.jp

■ 投稿締切り日 2月28日(火)